

マフムード朝研究史料覚書

服部直人

サーマーン朝から分岐してガズナを拠点として発展した王朝は通常「ガズナ朝」と称されるが、その名称はモンゴル族西征以降の時代の史書に至って漸く導入されたもので、それ以前の諸史書では別の名称で知られていた。それが「マフムード朝」である。本稿ではこの用語を使用する^①。主要文献と書籍の略字は次の通りである。

- A. A. Fayyâdī, “Yādūnāna-ye Tarīkh-e Baihaqī, vol. II”, Mashhad, 1971.
- Arends = *Tarīkh-i Masīdat*, tr., A. K. Arends, Moskva, 1969.
- TS = *Tarīkh-e Sīstān*, ed., M. Bahār, sec. ed., Tehrān, 1352.
- Smirnova, = *Tarīkh-i Sīstān*, tr., L. P. Smirnova, Moskva, 1974.
- AH = Fakhr-i Mudabbir Mubārakshāh, *Ālūb al-Harb wa al-Shujāʿ*, ed., A. S. Khwānsārī, Tehrān, 1346.
- TN = Jūzjānī, *Tabaqāt-i Nāsirī*, ed., A. H. Ḥabībī, vol. I, II, Kābul, 1342-1343.
- Raverly = *Tabaqāt-i Nāsirī: A General History of the Muḥammadan Dynasties of Asia*, Tr. from Original Persian Manuscripts, first ed., 1881, rep., New Delhi, vol. I, II, 1974.
- TTY = ‘Uṭbī, *Tarjome-ye Tarīkh-e Yamīnī*, Per. tr., Jurfā-dqānī (603 AH), ed., J. Shoʿār, Tehrān, 1345.
- ZA = Gardīzī, *Zain al-Ahbāʾ* (440-444), ed. A. H. Ḥabībī, Tehrān, 1347.
- TA = Khwājah Nizāmuddīn Ahmad, *The Tabaqāt-i Akbarī*, Bibliotheca Indica, CCXXIII, vol. I, Calcutta, 1927.
- TB = Abū al-Faḍl Baihaqī, *Tarīkh-e Baihaqī* (444-455), ed.,

1970.

TC = M. Qazvinî, *Ta'rikh-e Guzidâh* (730), ed., E. G. Browne, London, vol. I, 1910.

RS = Mirikhvând, *Rauzat al-Safâ*, Lucknow, vol. II, 1883.

ZN = Sharaf al-Dîn 'Alî Yazdî, *Züfer Nâma*, ed., A. Urunbayerov, Tashkent, 1972.

Babur = Z. M. Bâbur. *Bâbur Nâma*, tr. A. S. Beveridge, New Delhi, 1970.

RA = Muḥammad Riḍâ Harawî, *Riyâḍ al-Ḥiwâh*, facs. ed., Kâbul, 1967.

MIRA = Muḡaddimah-ye Riyâḍ al-Ḥiwâh.

PK = Moḡammad Hotak, *Pala Khazâna*, ed., A. Ҳ. Ҳабibi, Kâbul, 1944.

Biruni = *Kitâb fî Tuhfâq mâ li al-Hind*, Hyderabad, 1958.

Sachau = *AlBeruni's India*, India ed., 1964.

HA = *Hudûd al-'Âlam*, tr., V. Minorstky, sec. ed., with additional material, ed., C. E. Bosworth, London, 1970.

BGA = Bibliotheca Geographorum Arabicorum.

Turkestan = W. Barthold, *Turkestan down to the Mongol Invasion*, third ed., London, 1968.

The Life = M. Nâzim, *The Life and Times of Sultan Mahmûd of Ghazna*, sec. ed., New Delhi, 1971.

Ghaznavids = C. E. Bosworth, *The Ghaznavids: Their Empire in Afghanistan and Eastern Iran 994-1040*, Edinburgh, 1963.

TMA = A. Ҳ. Ҳабibi, *Ta'rikh-e Muḡhasir-e Afġhânistân*, vol. I, Kâbul, 1967.

PLG = idem., *Pashlo va Lōyukân-e Ghazna*, Kâbul, 1341.

Pazhwak = A. Pazhwak, *Ghâriyân*, Kâbul, 1345.

Thomas = E. Thomas, "On the coins of the Kings of Ghazni", *JRAS*, 1848, pp. 267-386; idem., "Supplementary Contributions to the series of the Coins of the Kings of Ghazni", *JRAS*, 1860, pp. 138-208.

TEG = C. E. Bosworth, "The Titulature of the Early Ghaznavids", *Oriens*, 1962, pp. 210-233.

IQ = idem., "Notes on the Pre-Ghaznavid History of Eastern Afghanistan", *Islamic Quarterly*, 1965, pp. 12-24.

CNT = Gh. S. Humâyûn, "Chand nokte-ye tâze dar bare-ye Ta'rikh-Bairhaqî, Mejmû'e-ye soḡharyant-hâ-ye Mîrles-e *Borzorgâshk-e Abû al-Faḍl Bairhaqî*, ed. J. Matînî, "Yâ-

dhâma-ye Baihaqî, vol. I”, pp. 778-798.

KTB=Nâsir al-Dîn Shâh Husainî, “Kashânîyân va Tayrî-kh-e Baihaqî”, *ibid.*, pp. 354-363.

TBA=A. H. Ĥabîbî, “Taḥqîq-e barknî az amâkin-e Tayrîkh-e Baihaqî”, *ibid.*, pp. 137-152

No. 1 Letter=Letter from Mr. N. M. Lowick, the Assistant Keeper, the British Museum, dated 31st Oct., 1974.

No. 2 Letter=Letter from Mr. Lowick dated 27th Dec., 1974.

No. 3 Letter=Letter from Mr. M. L. Bates, the Associate Curator, the American Numismatic Society, dated 18th Jan., 1975.

No. 4 Letter=Letter from Mr. R. Curiel, Bibliothèque Nationale, Cabinet des Médailles, dated 19th Feb., 1975.

No. 5 Letter=Letter from Mr. Bates dated 1st Mar., 1975.

No. 6 Letter=Letter from Mr. Curiel dated 5th Mar., 1975.

No. 7 Letter=Letter from Mr. Curiel dated 13th Mar., 1975.

No. 8 Letter=Letter from Mr. C. E. Bosworth, Professor of the Manchester University, dated 17th Mar., 1975.

No. 9 Letter=Letter from Mr. A. A. Bikov, Leningrad, da-

ted 25th Mar., 1975.

No. 10 Letter=Letter from Mr. I. G. Dobrovolskiy, the National Hermitage Museum, dated 26th Mar., 1975.

No. 11 Letter=Letter from Mr. A. A. Mehriyânî, Râmsar, dated 16th Apr., 1975.

No. 12 Letter=Letter from Mr. N. Lowick, dated 30th May, 1975.

① 加賀谷寛「ギクナ朝支配のネーサン地方の宗教集団」『西園
ノムン研究』111号 TB, p. 944: Daulat-e Mahmâdi;
ZA, p. 175: Padeshahi-ye...Mahmûd; *Muḥmal al-Taawriḥh al-
Qisas*, ed. M. Sh. Bahar, Tehrân, 1318, p. 20: Al-e Mahmûd;
TN, p. 225: al-Sebûkceginîya; Ibn Funduq, *Ta'riḥh-e Baihaq*,
ed. A. Bahmaniyâr, Tehrân, 1970, p. 70: Mahmûdiyân; TG, p.
393: Ghaznaviyân; RS, p. 732: Daulat-e Ghaznavîya.

一 ノムン朝貨幣上の新資料

筆者は一九七三年一〇月八日、ノムンにて街頭で展示されてきた古い貨幣を吟味したが、その際に次の銀貨を入手した。写真(A表、B裏)参照。

表 (Obv.)	裝飾/ia iaha illa/Allah wahdu li hi/ia Sharku li hi/ al-Qadir Biliâh
裏 (Margin)	...al-madina...ih...



① Photo No. 1 (ANS), ② Photo No. 2 (ANS)
 ③ Photo No. 3 (BM), ④ Photo No. 4 (BM)

(1)表 裝飾は花柄。イスラーム貨幣の裝飾の起源や意味は未だ十分に解明されていない。特定の人物か土地等を示す例はあるが、同じ裝飾が Khwarizm Shah 'Ala' al-Din Takash の五六九年 Khwarizm 鑄造の金貨にも見られるのでこの場合も意味は判

裏 (Rev.)	Muhammady/Rasulu Allahi Jalal/al-Dawlah wa Janal al-Millah Abu Ahmad/Muhammad
縁 (Margin)	wa yaumay'idhim yafrahpu al-muminnuna bi nasri Allahi yanasuru min yashah'u

らぬ。次に『コーラン』のムハンマド章一九のカリマと補助文句とアッバース・カリフの al-Qadir Billah (三八一—四二二在位) が刻されている。

(2)表の縁—歴史研究上重要な鑄造年と鑄造地が入る。文字の輪郭が残るのみで判読は難渋した。筆者は一応「バルク・四二一年」と考えたのであるが、この重要問題を未熟な筆者の一人合点で済ましてはならぬと思い、大英博物館、米国貨幣学会、パリ国

立図書館と順々に拡大写真を送付し厳密な意見を求める手数を選んだ。前二者の回答は要するに「多大の試みによっても判らぬから判読を留保する方が賢明、結局貨幣は流通するし、ムハンマドが父の在世中のみに彼自身の名に於いて貨幣を铸造するの不可能ではない」、^③ というものであった。ところが、最後に国立図書館キユリエル氏は「年は疑念なく四二二年。不幸にも铸造地の名は読み易くない。恐らく初めの文字は *madinat* と読み得、恐らく二番目の文字は *Biya* であったであろう」と判定された。^④ 同氏はフランスのアフガニスタン考古学調査団の団員としてスルク・コタールの碑文やバクトリア貨幣等に業績のある碑文学、貨幣学の大家で、同氏から得たこの解読は貴重なものである。年は問題なくなつたが、場所はやはり疑問として留保し、有力な新発見を待ちたい。ガスナカバルク以外は考えられぬ。何れであってもそれは後述の政治史を探る一つの鍵となるであろう。

(3) 裏—『コーラン』の勝利章二九に次いで、「國家の栄光と宗教の優美」という位階が刻されている。カリフが四一七年一〇月(一〇二六年二、三月)にマフムードのソムナート征服を記念してその一族に位階を授与したものの一つである。^⑤

(4) 裏の縁—『コーラン』のギリシア人章三、四引用。「前の場合も後の場合もすべてはアッラーの摂理。その日が来たら、信者

たちも大喜び、アッラーのお助いで勝つたと。」^⑥ 東部イスラーム諸国でこの文句は貨幣によく導入されるものの一つである。

(5) 銘文の特徴—裏面一番上の「ムハンマド」の文字は興味深い。即ち、現在のガスナ市に在るマフムード廟の第二メフラープの碑文中に同じ文字型で残っている。次のがその碑文の一部である。^⑧

𐤀𐤁𐤃

同じ裏面で信仰文句がクフィー体、治政者名が続き書きのナスキー体で刻されており、米國貨幣学会のバート氏に質問したところ、当時の貨幣に稀ではないという。^⑨ が、同じ米國貨幣学会のマイルズ氏に依ると、この事例の最古のものは、バルクを都とした *Banjūr* 朝の *Ahmad b. Muhammad b. Yahya* の二九七年バルク铸造のものだといふ。^⑩ もしバルク铸造貨幣の特徴の中にナスキー体があるとすれば、筆者の銀貨がバルク铸造である可能性が強まるわけである。

① O. Codrington, *A Manual of Muslim Numismatics*, London, 1904, Rep. Amsterdam, 1970, p. 18.

② Т. Холманисов, "Клад золотых монет XII в. из Куна-Урени-ского Района Туркменской ССР", *Сингапура Востока*, 1971, стр. 93.

③ No. 2, 5 Letters.

④ No. 6 Letter.

- ⑤ Thomas や Sourdel (後述) のガズナ朝貨幣目録に依ると貨幣銘文の都市名に *madina* の付くものは「*madina*」^①。Thomas は貨幣に地方色があり、バルクのは薄くて広いというし、Codrington はバルクに *madina* が付くことはあるがガズナには付かぬという。Thomas, 1848, pp. 281, 317; Codrington, op. cit. pp. 140, 172.
- ⑥ Za, p. 191.
- ⑦ 井筒俊彦訳『ローラン』中 岩波文庫二六七頁。
- ⑧ Shaikh Muhammad Rida Harawi, *Riyad al-Ashwah*, facs. ed., Kabul, 1967, p. 57. 著者のハラウイーはアフガン近代の書道の大家で当時の國王ハビーブ・フッラー (Habib Allah 在位一九〇一—一九一九年) に献上するために、ガズナに残る古い碑文を数多く探求して、碑文を刻されている字体そのままに採取し、自分の解説を優雅なナスターリク体で記し、『墓誌銘の庭園』と題する書物を作った。本書の序は唯一無比のガズニン市小史の体裁を成し、続く数々の碑文は貴重なアフガン中世史の資料集と言える。ハラウイーによる特筆すべき業績の一つをここに紹介する。ガズナ市に二つミナレットがあることは前世紀以来有名で、ミナレット碑文も同時に注目を集め、一方は長い間「マフムードの戦勝塔」とされてきた。それが一九五三年に出たスールデル女史の論文で「*Minar al-Muhammad* の塔」と訂正されたはずであったが、未だに例えばイラン美術の最高權威のポーブ教授はマフムードとマスウード二世の塔と言及している有様で、他にもマフムード説は多かろうと思われる。この微妙で重要な疑問は我々としても正しく理解しておきたいが、実にスールデル女史も知らなかつたこのハラウイーが見事に解明していたのである。

(S. Flury, "Le décor épigraphique des monuments de Ghazna", *Syria*, 1925, pp. 65-68; A. J. Toynbee, *Batavia Oriens and Summa*, London, 1961, p. 55; Article, "Ghazni", *Encyclo-*

paedia of Britannica; J. Sourdel-Thomine, "Deux minarets dépeque seifoukide en Afghanistan", *Syria*, 1953, pp. 110-117; A. U. Pope, *Persian Architecture*, London, 1965, p. 99)

以下にその条を全訳して提示するが特殊な語や表現が多く、きりぎりす訳であるが、とも角、原文をそのまま直訳する。すなわちガズスタン歴史学会は本書の解説書を出版する予定だという (*Jahangiristan*, Fall, 1967, p. 100)。

「両方のミナレットは大体ガズニン市の北方半キロ程の所に在り、両ミナレット間の距離は八、ハフルーで、高さは約八〇—九〇フィートで、二つ共、上部は脱落し、崩れ、下部は削られ、旋回がは取られてしまったが、漆喰の上に記されたクーフィー文字の碑文は両ミナレットの頂上近くに残存し、それらのクーフィー文字は崩れておらず、十分判読できる状態にある。都市に近い方のミナレットから、^①Ala' al-Dawlah Abu Sa'd Mas'ud b. Zahir al-Dawlah Ibrahim の名が、遠い方のミナレットから^②Bahram Shah b. Sultan Mas'ud の名がそれぞれ判読される。それは二頁前に同じクーフィー文字の復写に示した通りである。ミナレットの残りの部分にも銘刻があり、それらの所々にアルラーの言葉の文句、賞讃や感謝の告白がクーフィー文字で刻されていたが、それらの字面は落ち、崩れている。前述の両ミナレットは漆喰と土塊によって極めて強固に建造されたのである。スルターン・ハマスウードと、ハフラー・ムハムマドの時代から約七、八百年経過しているに拘らず、今だに堅固で、がっしりしている程である。ガズニンの住民はこう話している。つまり両方のミナレットは法廷の爲の標識、象徴として作られたものであり、訴願者たちは遠方からその標識を見て、法廷に歩を進め、事情陳述をしたものであった。しかし、それらの各方面に至高の創造主の賞讃と神聖化に

満ちるカーフィー文字で記された文句や告白から、両方共がモスクのミナレットであることは明瞭である。如何なるムルタンたるの記念物なのか理解するためにこの書物に解釈を陳述しておく。

ガズナ朝のムフラーム・シャヤーの称号はその名を冠するミナレットのカーフィー文字から Yamin al-Dawlah wa Amin al-Millah と知られる。僕が見た『^④諸史の秩序』とガズナ朝のムルタンの貨幣によれば、この称号はムルタン・マフムードのものである。しかし、諸史家の中^⑤に、マフムード・ムスタウフィーはムフラーム・シャヤーの称号を Yamin al-Dawlah と記し、『^⑥清浄園』と『^⑦フヘンツタの歴史』の著者ならば、Murizz al-Dawlah と書き記し、僕自身もムフラーム・シャヤーの貨幣に Murizz al-Dawlah を読み取った。^⑧つまり、彼のミナレットと貨幣の解釈からムフラーム・シャヤーの称号は最初 Yamin al-Dawlah であつたが、やがてムルタン・マフムードの称号との間違ひを除去する為^⑨に、彼が Murizz al-Dawlah の称号を名乗つたのであること^⑩は明白である。アルラーの前の寂知にかけてそのカーフィー文字の字面が刻されているその通りに提示されたのである。』(六一—六三頁)

④ Pahlā ⑤ 生四五三年—没五〇九年 ⑥ 五一—五四七年治政 ⑦ Divān-Khane-ye 'adalat ⑧ Siyāq Tawarikh ⑨ FG, p. 405; Sourdel, op. cit., p. 81 ⑩ ①の銘文を有する貨幣は Thomas, 1860, p. 185 ② Sourdel の報告を採っていない。

〔ガズナのミナレットの碑文〕

○ガズナから近い方のミナレット碑文

Bismi Allahi al-Rahmani al-Rahimi al-Sultān al-Azām

Malik al-Islam Yamin al-Dawlah wa Amin al-Millah
Abū al-Muzaffar Bahrāmshah Khalalada Allah tarala
mulka-hu

○ガズナから遠い方のミナレット碑文

Bismi Allahi al-Rahmani al-Rahimi al-Sultān al-Azām
Malik al-Islam 'Alā' al-Dawlah wa al-Dīn Abū Sa'd
Mas'ūd b. Zahir al-Dawlah Amir al-Mūminin Ibrahim
Khalalada Allah mulka-hu

つまり①のミナレットはマスウード三世とその子ムフラーム・シャヤーとごう親子のものであつたのである。

② No. 5 Letter.

③ G. C. Miles, "Numismatics", *Cambridge History of Iran* (CHI), vol. IV, London, 1975, p. 373 and plate 27 (no. 2).


二 参照可能な全ムハンマド貨幣

鑄造地解明と同デイルハムの全ムハンマド貨幣群中に占める位置を把握確認のため貨幣学の先進各国に照会し、マフムード朝研究の一資料となし得るよう努めた。パリ国立図書館は唯一の所蔵物の精巧な石膏模型、米國貨幣学会と大英博物館は各々保管の二個のポラロイド写真を提供され、写真公表の許可も授与された。








エルミタージュ博物館の主任学術研究官ドブロヴァリスキー氏は三ヶ月の療養後にも拘らず直ちに所蔵の全ガズナ朝貨幣を検査されたが存在は確認されなかつたという。^①カール博物館へは七五

年二月八日付で照会するも全く返答はない。が、スールデル氏の『目録』にはない。^② 筆者はガスナ博物館について知らぬが、マザーレンシャリーフ博物館にはかなりのバルク将来ディルハムが未整理のままガラスケース内のお椀の中につめてあった。^③ 館員は何人にも触れさせないという。全くの死蔵で惜しいことである。この結果、現存するのは全部ディルハムと判明し、次にリスト化したみた。このリストで特筆すべきことは従来ムハンマドの四二一年鑄造のディルハムの存在はトーマスの仮説があったが、ここに初めて三種五個の同年ディルハムが確認出来たことである。だが、鑄造地は何れも全く判読不能であった。既にトーマスが発言した通り、マフムード朝貨幣は全般的に打ち型が金属板より大きいため縁が良好に残っているものが少ないためである。

これらディルハム群の特色を記す。No. 1 に対しトーマスは *sana ih-* から鑄造年を四二二と推定したが、^④ 筆者は彼の四二一年のディルハムにある四一七年の位階が無く、裏面に Mahmud の名があるので四二一年と考定した。トーマス自身も他所では四二一年と記している。^⑤ *Wawālin* は *Walwālin* と同一である。Thomas の Plate, fig. 7 は fig. 5 に図版記号を訂正しなければならぬ。No. 2 (Photo No. 1 参照) と No. 3 (Photo No. 3) は表、裏とも銘文形式が同一だが表面上方の装飾に問題がある。

ベート氏作図の装飾  は No. 3 と相異する。^⑥ だが私は両者は同一装飾と考える。ベート氏の誤解であろう。ベート氏提供写真からも No. 3 の装飾がうっすらと見える。No. 3 の測定重量はトーマスに依ると三六 gr. で二・三三 gm. に相当し、ロウィック氏に依ると二・二九 gm. であるが、これは ANS の四・三七 gr. と全く違うので驚ろく。トーマス論文は先にも示した如く印刷ミスがあり、36 は 63 の誤植ではないか。それだと四・〇八 gm. となる。筆者は No. 2 を「四一四年 [Turkian 鑄造] と推定す」。両者共、裏に *Yamīn al-Dawla wa Aīmīn al-Millah, Nizām al-Dīn, Abū al-Qasīm* と父マフムードに対する最高の配慮が見られる。イはマフムードが三八九年バルクでカリフから拝受した位階で、^⑦ *h* は四〇三年に得た位階であった。^⑧ No. 4, No. 5 (Photo No. 2), No. 6 (Photo No. 4) は銘文形式が全く同一で装飾も三者共に僅かの微妙な相異を除き大体同一である。この中で No. 4 (ハリ) の石膏模型が私の手本にあるが *sana ahad wa 'ashara wa ar-* (四二一年) と明瞭に読める重要である。鑄造地はキェリヘル、ロウイック両氏によってペリで検討されたが判読不能であった。打ち型の方が大きいためである。No. 6 (Photo No. 4) は目下大英博物館保有の C. J. Rodgers 一八八三年寄贈になるものである。二・五九 gr. と軽くのは右下部分が欠損

[Muḥammad b. Maḥmūd Dirhams]

No.	Date	Mint	Symbol	Weight	Diameter	Owner	Reference
1	411	Wāwālin	'Adl	3.24 gm	19 mm	Col. T. Bush	Thomas (1860, no. 18)
2	41X (maybe 414)	Jūzjān		4.37 gm	21 mm	ANS ₂ (Photo, No. 1)	No. 3, 5 Letters
3	414	Jūzjān		4.08 gm	21 mm	T. Bush→BM (Photo No. 3)	Thomas (1860, no. 17) =Poole (vol. II, no. 519)
4	421	?		3.58 gm	17.5 mm	BN	No. 4, 6, 7 Letters
5	421	?		3.98 gm	18 mm	ANS (Photo No. 2)	No. 3, 5 Letters
6	421	?		2.59 gm	18 mm	Mr. Masson→ BM (Photo, No. 4)	Thomas (1848, no. LVII), No. 12 Letter
7	421	Ghazna or Balkh		3.62 gm	19.5 mm	N. Hattori (Photo, A, B)	In Balkh, 1973
8	421 (maybe)	?		3.89 gm	19 mm	Mr. Frere	Thomas (1860, no. 19)

The Hermitage Museum, No specimen of Muḥammad Dirham, No. 10 Letter.
The Kabul Museum, No reply to my question dated 8, Feb., 1975; In D. Sourdel, *Inventaire des monnaies anciennes du Musée de Caboul*, Damascus, 1953, no mention to Muḥammad Dirham.
ANS=the American Numismatic Society
BM=the British Museum
BN=Bibliothèque Nationale
Poole=Lane Poole, *The Catalogue of Oriental Coins in British Museum*, 1876, London

しているためである。No. 7, No. 8 (Plate fig. 7) は銘文順序と内容は同一だが表面の装飾と裏面上方の Muhammad 文字型等と相異なる。Abu Ahmad (アハマドの父) の内的意味に対するトーマスの見解はマフマドが首の父を補佐したことの表われというものだが、後でもこの問題に触れるが、正鶴を射たものではなく、これは彼の若い頃からの通称であった。装飾は合計四種類認められる。何れも装飾の意味は判らぬ。

とも角ムハンマドの貨幣は五種八個しかない。死蔵されているものを考慮してもこれは非常に少ないのではないか。エルミタージュ博物館の前貨幣学部長ウィコフ氏に依ると、サーマーン朝の英傑イスマイルの息子アフマドの銅貨が一枚も発見されていないという。同氏はこの点に彼が父の銅貨に満足して铸造しなかったか、僅かしか铸造しなかったかと考えられたが、ムハンマドの場合も同じことが推量されるのではないか。TBに依ると、ムハンマドは王位就任後、国家の主な人々に莫大無限の途方もない種の貨幣やその他を授与し、それで全軍隊も彼に服従を誓ったとい^④い、これを評して著者バイハキーは「世の人はディーナールとディルハムの奴隷なり」と嘆息している。何しろ前例のない程の巨額であつたらしく、政変後にマスウードが四二年六月八日（一〇三一年六月二日）にガズニンに到着して取り組まねばならな

かった最大の内政問題こそは、そのムハンマド授与になる大量の財貨を如何にして回収するかであつた。^⑤つまりムハンマドは父の無尺蔵とも言える程の金、銀貨——マフムード自身の発言によると「我々の諸要塞の地面は金銀貨の荷重に喘いでいる……」——を遺産として相続したから、彼は満足して貨幣は名目上若干铸造したにすぎないのではないか。又は、ムハンマドの治政期間（後述参照）の短かさを割りには多く铸造したと評価すべきであろうか。

① No. 10 Letter.

② Sourdel, *Inventaire*, p. 52; M.F.C. Martin (Allahabad), "Some rare Ghaznavids Coins", *JAS of Bengal*, 1929, N. 75-78 に於ける。

③ ガラスケースに次のような文意の説明文がついていた。「これらの銀貨はバルク将来の良好な五二四個と摩滅した八六個の合計六〇〇個から成り、合計重量は三三八ミスカール（約一・六kg）に相当す。一三三四年」 Shikhat-e noqre ke dāri NYSHTA *Klime-ye TTYe sharyf mi-bashad va az Balikh be-dast āmad be ta'dād (514) ābād* (86) shekaste jomle mi-shavad (600) dāne mu'ādh (348) mi-tiqāl, 1342. イタリック部は意味が判らぬ。

④ Thomas, 1848, p. 281.

⑤ Thomas, 1860, p. 164, n. 1.

⑥ *ibid.*, p. 185, 図版 No. 17 と No. 18 を指す。

⑦ Sourdel, *op. cit.*, p. 136; Thomas, 1860, p. 164.

⑧ No. 5 Letter.

⑨ No. 12 Letter.

- ⑩ ZA, p. 175.
 ⑪ TEG, p. 217.
 ⑫ Thomas, 1850, p. 164.
 ⑬ A. A. Барков, "Номант кизд мелных кыргычских монет из Таджикистана", *Труды Института Исламистике Государственного Эрмитажа*, т. 1, 1945, стр. 99.
 ⑭ TB, p. 339: *Mali sakht bi-muntaha wa 'azim. bud.*
 ⑮ TB, p. 18: *Ahlu al-dunya 'abidu al-Dinari wa al-Dinami.*
 ⑯ TB, pp. 335-340: *Ghaznavids*, pp. 69-70.
 ⑰ TB, p. 918.

三 ムハンマドの事蹟

これまでムハンマド・ディルハムについてやや詳細な紹介を行なったのは、これを堅固な基礎としてムハンマドの事蹟を探求するためであった。イスラーム貨幣学は欧州では既に二五〇年もの伝統があり、^① 我国では著しく遅れているわけだが、今日、イスラーム圏のどの地域のどの王朝を研究する場合も貧弱な文献を強力に補助するため貨幣学なくして最早成り立たないと考えねばならないのである。

以下の考察で貨幣の他では TB と ZA (わけづみ TB) が最基史料である。TB は現在その大著の僅か一部しか残っていない。筆者が新たに本稿のためにムハンマドを中心に据えて内容を検討

したところ、実に豊富な記述が見出され、実に全体の半分が彼に直接間接に関係し、後半がマスウードの事蹟の記録であることを知るに至り、従来の諸研究^②がこの問題を避けて詳細に立ち入らなかつたのが不思議とさえ思われる程である。筆者は従来の諸研究の空白を補うべくムハンマド問題に踏み込んでみようと思ひ、実行に移したわけであるが、その過程で意外な程多数の疑問、難問が続出し、一体我々はマフムード朝の真相を把握し得るのだろうかと王朝研究史料自体に対し大きな疑問をいだかざるを得なくなつたのである。なお、本節で言及する殆どの地名については第四節でまとめて考察してある。

(A) 生誕より四二一年まで

先ずムハンマド、マスウードというマフムードの有力な二人の息子の年齢関係が不明である。両兄弟はマフムードがネシャープール総督の頃、三八七年に何処かで生れた。^③ マフムードの姻戚関係は残念ながら全く不明である。生母 (Walida) は異なるらしい。TB にマスウードの生母のみ *Walida-ye Amir Mas'ud* と出る。^④ TN に依ると両者は同日生れたが、TB で見て確実ではない。年齢関係に対し、AH はムハンマドが年上^⑤、ボスワルスは年齢関係不明とし、ムハンマド後継指名に末子相続の仮説をたてた。^⑦ ボスワルス説はバルトリド・ハビービーのマスウードが年上^⑧との

説に乗ったものである。この問題はTBが決め手にならないので困るのだが、筆者はTB説を疑問とし、ユール朝時代の記録のAHを信じ、TBの記事に頼り、ムハンマドの方が同年ではあるが先に生まれたとの仮説を考えたい。両兄弟は四〇一年（一四歳）に、セントチャキンの第四十七歳のYusufと共に Zamindavar で養育された。Zamindavar はヘルマント川西部流域とゴール山地南部との間の地域で、マフムードは父セブクティギンから初めて授与された土地として「めでたい」と考えたのである。当時そこはマフムードの初期のグラーム(Ghulam)の Bayt-ghin Zamindavari に支配されており、三人は彼の屋敷に暮らした。TBに詳細である。

四〇一年に Juzjan の地方王朝 Farighun 朝の最後の王 Abū Nasr Ahmad が死ぬ。マフムードはムハンマドに Juzjan を授与するが、その日時が多少問題である。ミノルスキーはTBの四〇一年、ZAの四〇八年の両説を並べ自説を披露せぬが、ナージムーボスワルスは四〇一年に彼が同地の支配者となるとした。筆者は以下のように考えた。四〇一年にマフムードは彼を Farighun 朝の先の王の王女と婚約させ、彼に封土として同地を授与したが、年少故に実権は与えず自身が保持し、四〇八年に彼はホラズム遠征を敢行して、ムルクに帰還、両王子を招集し、ムハンマドに

同州を正式に授与し、補佐官 (Kadkhoda) に Abū Bakr Qubhi-stani を任命し、同じくマズワードにヘラート州を授与し、Abū Sahl Zauzani を補佐官に任じた。Zauzani は後に軍事庁長官 (Arif) / 公文書庁長官 (Sahib-e Divan-e Risalat) となる。正式の領土主権授与は貨幣鑄造権授与を伴うが、現存の二個のムハンマドのディルハム (No. 23) と、マズワードの四××年のディーナール^⑮はその前提を証明している。後者は史実に依れば、四〇八年に Herat 鑄造か、四二〇年頃の Rayy 以外考定できぬ。マフムード自身もその頃ヘラートで連続して鑄造しているのである。ムハンマドは四〇八一—四二一年の長期殆ど同地に在り、その間に、四〇六年のマズワードの法定推定相続人 (Wali 'ahd) への就任の既成事実を覆すに至る。マズワードがTBの著者に語った所に依れば、彼はムハンマドの陰謀にはめ込まれ父の恩寵を失なったのだという。必ずしもそれが真相ではないであろうが、マズワードの不遇と、両者と父の関係を示す事件がTBにある。王家の後継者の決定と体制強化のため、マフムード自身の指揮の下、ムハンマド派ユースフ (四二三年に三九歳で Dardic 要塞にて没) とムハンマドの関係緊密化のため、ユースフの二人の娘の内の長女とムハンマドの婚約が決定され、ガズニーンの小広場前のムハンマド王宮 (Sarāy-e Amir Muhammad ke barābar Meidān-e

Khoid ast) で華麗な結婚式が挙行されたが、花嫁は婚礼の日に急死した結果、翌日マフムードはユースフの次女で一旦マスウードと仮婚約を交した娘をムハンマドに与える次第となる。マスウードは悲嘆し、この事で遺恨を懐いたらしい。この王女は余りに幼なくて、ムハンマドの後宮に入るのは、四二年のマフムード没後の彼の即位した頃で、その時でもまだ一四歳であった。この奥方はマフムード朝の混乱期を生き抜き、TB 著述の日々の四五〇年頃にもガズニーで余生を送っていたという。以上の話の年代は確定できぬが Juzjan 期なのは定かである。

マフムード朝時代の宮廷詩人 Farrukhī の詩集にムハンマドとその土地での統治時代を示唆する詩がある。シホーズシャーンやムクタの早春の美で彼を讃える歌謡に「Kurziwān の丘陵や森」が言及されている。^③ Kurziwān はフンタル朝^④、フアリグーン朝^⑤の頃より同地方の夏の首都であったが、彼の時代も同様であったとの事実が判明する。ユーール朝、ホラズム・シヤール朝期には堅固な要塞都市と化し、西征中の成吉思汗も攻略に手をこたすり、ムーンも訪ね、現在 Maimana 市南東の Sar-e Pul 川に沿った Gurziwān 村とあり、気候の良く高原と云う。^⑥ この多様な歴史経過からみて Gurziwān の何らかの調査が切望される。首都問題は決着してないが冬期の首都は年々 Anbār (現 Sar-e

Pul) か Jahūdan (現 Maimana)^⑦ と移動したと筆者は推定している。彼は四一年頃おぼろげに長子 Ahmad を得て Abū Ahmad と名乗る。ムハンマドの後の補佐官は Muhammad b. Mihrān^⑧、次にイシノ子 Hasan b. Muhammad^⑨ がおぼろげだ。ムハンマド逮捕の政変後、同地方の支配者にはムハンマドのグラームの Nāshtegīn が任命された。マフムード没後彼はこのグラームをガズニーに帯同し酒くま (Saqi) としたが、マスウードが彼がこの地方を授与した。^⑩

① G. J. Kern, *Monarchie Asiatico-Saracenicæ status quævis VIII-IX sæculæ fuit ex nummis argenteis prisca Arabum scriptura cufica-curvis et nuper e fossis, illustratus*, Lipsiæ, 1724. 112-113. Jarmila Štepková, "Über das Wesen und die Funktion der Dirhamenbuchstücke", *Charakteria Orientalia*, Praha, 1956, S. 329 参照。

② ガズナ朝の名の由来の概説は牧野トシユキがなす。C. E. Bosworth, "Ghazna", *Encyclopaedia of Islam*; B. Spuler, Art., "Ghaznavids", の各項目の終末文節を参照のしよう。

③ TB, p. 132.

④ TB, pp. 19, 87 (Wālid-ye Amir Mas'ūd).

⑤ TN, vol. I, p. 232; Raverty, vol. I, p. 91.

⑥ AH, p. 268 (Sulṭān Muḥammad pesar-e mehtar-e ā bād).

⑦ Ghaznavids, p. 273, n. 37; idem, "A Turco-Mongol Practice amongst the Early Ghaznavids?", *Central Asiatic Journal*, 1962, pp. 238-239.

- ② Turkestan, p. 293; TMA, p. 144.
- ③ HA, pp. 345-346; IQ, p. 20; A. H. Habibî, "The Temple of Sunagîr, Zoon or Zoor in Ancient Afghanistan", *Afghanistan*, June, 1972, p. 77.
- ④ 'Auri, *Jawāmi' al-Hikayāt*, facs. ed., Tehran, 1335, pp. 38-39
 ⑤ 註 11 ⑥ 註 12 ⑦ 註 13 TB, pp. 132-136.
- ⑧ 'Uthbî, *Tarîkh Yamīnī*, pp. 101-105; TTY, pp. 294-298; *Tarîkh-e Ghaznaviyân wa Samanīyân wa Al-e-Bghya az Jāmi' al-Tawârîkh*, ed., M. D. Siyāqî, Tehran, 1338, p. 117.
- ⑨ HA, pp. 173-178.
- ⑩ The Life, p. 178; Ghaznavids, p. 47; TTY, p. 295.
- ⑪ ZA, p. 182; TTY, p. 367; D. M. Dunlop, Art., "Farighūnids", *EP*, p. 799.
- ⑫ Thomas, 1848, No. 21.
- ⑬ Thomas, 1848, p. 375.
- ⑭ The Life, p. 167; Ghaznavids, p. 227.
- ⑮ TB, pp. 138, 160. 特別にその朝記を「直譯本 Mushāfat al-thani, TB, pp. 274-280.」の大部分でこの「直譯本」を「mushāfat」を「直譯本」を知ったと主張して「直譯本の書記の心得を参照した」と認めておられる。Muhammad b. 'Abd al-Khalīq al-Meihamî *Dasīq-i Dabīrī*, ed., A. S. Erzi, Ankara, 1962.
- ⑯ The Life, pp. 84, 168-169.
- ⑰ TB, pp. 325-326; Arends, pp. 325-336.
- ⑱ *Dihān*, ed., M. D. Siyāqî, Tehrān, 1335, pp. 107-109. Dar vāsf-e bahār va madh-e Abū Ahmad Muḥammad b. Mahmūd b. Sebūktegīn.
- ⑳ HA, "Second Series of Addenda", pp. xxxvii-xxxviii, lxxv.

⑳ Ibn Haugval BGA, vol. 11, Leiden, 1967, p. 443. 彼は同地を訪問し「昔某のメシカと号した。」

㉑ TN, vol. I, p. 402; vol. II, p. 111; Juvainî, *Tarîkh-e Jalān-gosha'*, vol. I, London, 1912, p. 105; Codrington, op. cit., p. 148; Babur, p. 296.

㉒ TN, vol. I, p. 299, n. 1.

㉓ 予て予が中心の Juzjan 地方は有名な HA の著者の故郷である。

㉔ TTY, p. 368. 原典は四一年で完成した。

㉕ TTY, p. 369.

㉖ TB, p. 108.

㉗ TB, p. 527.

(B) 四二一年四月三日以降

フムードの没年は全く疑問なく四二一年四月三日木曜日(一〇三〇年四月三〇日木曜日)である。ガズニン市の北一・五キロほどある彼の墓碑とフムードの妹か姉の Hurra-ye Khuttalî (後節参照) がインスマンーンのペンワードに発送した秘密文書 (Mulfafa) の記述と完全に一致し、後者には午後後の礼拝時に死んだとき日記を記されている。ムハンマドは直ぐ政治代行者フリーを通じてガズニンからガズニンに招請され最高権力者として就任する。TB に注目すべき記述がある。その頃キヤ著者のフムードの書記であった。

「その夜、彼は水車の頭という我々の区域にある父の王宮か

ら支配者の宮殿に案内された。私はその非常に華麗な儀式を見たのである(仮記²⁾)」

彼の治政の主な人事構成は次の通り。將軍 (Sepahsalar) に叔父
ネースン^③、宰相に Abu Sahl Handawir^④、財務官 (Khazine dar)
に Sātimish-e-Hājib-e-Arslān (四二八年没)^⑤、侍従長 (Hājib-
e-Bozorg) に Ali Qarib 又は 'Ali Qurbat 又は 'Ali Khwī-
shāwand^⑥。第二節で紹介した通り彼の治政は「金権政治」だった。
宮廷人も軍人も民衆も治政が安泰と考える者はなかったようであ
る。この観点からみれば当時から彼が何故後継者になったか謎視
されてきたのも頷けるわけである。例えば、ビールニーの大著
『印度誌』は四二一年にマフムードの死後幾許かして完成したが、
献呈先がマフムード、ムハンマド、マスウード、その他の人物と
何れとも示されておらず、次いで同年に草稿の出来た天文学の
al-Qānūn を彼はマスウードに献上した^⑦。つまりかってホラズム
王の政務補佐官でもあった彼は政情に深い関心をよせ政争の成り
行きをじっと見つめていたと考えられる。判断良く時流に乗って
彼はマスウード治下では研究費の心配もなく研究に没頭し、彼の
壮大な大作 *al-Qānūn al-Nāsiri* を脱稿した。更に四二一年の
貨幣学資料を吟味してみると、四二二年バルク鑄造のマフムード
名の三個のデイルハムが現存しており、それぞれ年の他に二、三、

五月と月名まで刻されていることが判明した。〔No. 1 Letter
(Zanbaur, *Münzinsichische Zeitschrift*, 1914, p. 128, no. 447;
L. Poole, vol. II, no. 502, vol. IX, no. 502d)〕。更に Thomas,
1848, no. 50 (III) と no. 51 (五月) の $\frac{2}{5}$ の Thomas, no.
53 の同年三月ガズナ鑄造のものがある。四二一年になって急に
年の他に月名まで打刻された点は特異で、殊にマフムード没後の
五月にバルクでなおも鑄造されていた。何故かと言えばやはり彼
の死期が近づいても国民は一体誰が後継者となるのか情勢判断が
できず、時の経過と共に注意深く鑄造したと考へ得る。反面ムハ
ンマドが五月に漸くガズニンで着任した事を証左すると共にマ
フムード名の貨幣鑄造が終了し、リストに列記した No. 4, 5, 6,
7, 8 の如き彼のデイルハムが発行されたのである。ムハンマド
は決して平凡な人物ではなく、アラビア語の達人でアラビア語で
の詩作を好み^⑧、武芸では槍 (neze) の使い手であった^⑨。結局彼は
文人として著名でありすぎ、マフムード朝自体周囲すべて強敵の
中に存在するため^⑩、急速に支持を失なったようである。勿論単純
にそうとは判定できぬのだが、マスウードの武勇がイスファハー
ン方面に遠ざけられていたにも拘らずマフムード朝の本拠地に強
い圧力を及ぼしたというのが案外真相に近いかもしれない。何し
るマスウードのロスタムの如き勇壮さは蒙古のフラグ汗やムガル

朝の諸王にまで紹介された程であった。^④ 一体彼は何ヶ月程王座にあったか、はつきりと直接に最基本文献TBに、明記されてはいないが、ムハンマド、マスウードの四二一年の行動対照表を次に提示し、問題解決を計りたい。つまりこの表によれば彼の治政期間は五―九月の丁度五ヶ月である。これを確実な鍵として他史料を点検すると、他史料の真ひょう性を計る目安となろう。Ibn Bābā al-Qāshānī *Kitāb rat's nuzl al-nadīm* (側近の資本の書) に六ヶ月、TNに七ヶ月、TGに四年、とごまかす、五ヶ月と明記する史料が二つある。MRAとTAである。^⑤ 筆者はTAの記述がZAにそっくりであるのに気づき、ZAと詳しく比較対照したところ幾つかの相異箇所を直ちに発見したが、その一つは *Ayam-e jokūmat-e n panj mah na-raside* とごまかす重要な情報である。筆者はこれをTAが現存せぬ別の、インドにあったZAの第三の写本(ZA, p. 316, M. Qazvīnī 序文参照)を利用してと推定したい。既知の如く現存のインド将来のZAの二写本は一方は一方の写しにすぎず、本源写本でも一七世紀のものである。TAの序言には *Tarīkh Zaim al-Akhdar* を利用したと明記されている。^⑥ ZAの二写本の校訂者ハビービーはTAを利用しておらぬので、今後の研究では必ず常にZAとTAを同一に扱わねばならぬ。ガズナ朝の最高権威ボスワルス教授は筆者宛の書簡に Ibn Bābā

のガズナ朝の条を目下翻訳注釈中で彼の日付はイブラーヒームの治政まで正しくTBの紛失部分が利用されたに相違ないとの考えを示されたが、^⑦ 後述する実例から見ても Ibn Bābā の年代記述は事実と反するようである。諸文献のマフムード朝の記述すべてをTBに帰一するのは正しくないのではないか。極端にこの点で道を誤ったのは例えばイランの S. Nafisi であつた。^⑧

TNに依れば逮捕される際はフリー等によって視力を奪われた (*mit kashidand*) とごまかす。他にMRS, MRA, TG, Ibn Fandūq 等の盲目説があつて同説は圧倒的に有力である。更に一八世紀頃のインド知識人所有のTB写本の無数の注釈の中の一つに偶然筆者は次の注を発見した。^⑨ 難解な文章を含むが大意は次の通りである。

「親類のフリーなる侍従長は何故喜ばないのか。即ち彼は不正にも自分の大王であるアミールムハンマドを捕えて監禁したのである。……直ちにマスウードは最初の会見の時に彼(フリー)の首を切るだろう。何故なら彼(フリー)は彼(ムハンマド)の眼を言にしたのだ。アミールムハンマドは彼(マスウード)の権利において悪を働かなかつたからだ。」^⑩ 参考はこの注記の転記を次に示す。

Cherā Hajīb-e Bozorg ke 'Alī-ye Khwīshāvand bāshad shād

マスウード (Mas'ūd)		ムハンマド (Muḥammad)	
AH	(AD)	AH	(AD)
421, 4. 23(1030, 4. 30)	Sepāhān 在	421, 4. 23	Jūzjān 知事
5. 21(5. 27)	同地で父没の報を受く	4 月末-5 月初旬	Ghaznīn 到着, 治政開始
		6. 13(6. 18)	マスウード支持派でき, Bust へ逃走す
6. 25(6. 30)	Sepāhān 出発	7. ?	Bust の戦い, ムハンマド派破れる
?	Rayy 到着		
?	ムハンマド, ガズニーン掌握の報届く	8 月中旬頃	マスウード支持派 Neshāpūr 入り
?	カリフからコーラーサーン向出発拝命	8. 23-9. 1頃	ムハンマド Teginābād 到着
7. 13(7. 17)	Rayy 出発	(8. 26-9. 2)	
8. 10(8. 13)	Neshābūr 到着	9 月末-10月初め	同地で逮捕さる
9. 15(9. 16)	Neshābūr 出発	10月中旬頃	Qal'e-ye Kūhtiz へ護送
9. 29(9. 30)	Herāt 到着		
9. ?	Sistān の説教, マスウード名で	11月中旬までに	Qal'e-ye Mandēsh へ移送
10. 3(10. 4)	Teginābād 発ムハンマド処遇問い合せ書簡来る		
10. 7(10. 8)	Teginābād の説教マスウード名		
10. 15(10. 16)	10. 3 書簡への返答		
11. 15(11. 14)	Herāt 出発		
12. 15(12. 14)	Balkh 到着		

na-bashad ke be-na haqq Amir Muhammad-e Padeshah-e Khud
rā gerāfe mahbūs kārde bāshad va naqd rā dāde nazār bar
nuš'at baste bāshad chonāche kārde rāzgar bū n ziyāde he gere-
ftan-e jāid bāshad khawāhad kār' anqarib Mas'ūd dar malāqat-e
avval gardanash rā khwāhad zad tā chashmash kūr shode he
Amir Muhammad dar haqq-ū badi na-kārde bud.

(イタリッテ部の意訳。アリーは以前得た人生経験に基き王の恩賞に
与り、長生を得る予定だった。)

斯ように盲目説は数の上では有力であるが、肝心の TB と ZA
(TA) の全記述にその気配は全くなく、ホスワルス教授が「TB
は無論' Ibn al-Athir, Shabānkārā'ī, 'Alī b. Nāsir (*Akhbr*
al-Dawla al-Sajiqiyya) 等にも言及がなから怪しい」と見解
を示された。TB に依ればクーフティーズ要塞在の時彼は最上の
待遇を受け、勿論視力はあったし、彼の処遇は四二二年春にガズ
ニン到着後に熟考しようとの事であった。実際ムハンマド処遇
は容易に断を下せぬ問題であった。即ち四一六年にマフムードは
カラカン朝の東部領の覇者 Qadir Khān とサルカントで会見
し友好協定を結ぶ。それでマフムードの娘 Hurra-ye Zainab と
Qadir Khān の息子 Yaghāntegin (後の Bughūrā Khān) の婚
約と、ムハンマドと Qadir Khān の娘の婚約が締結された。四二
一年頃もまだこの件は実現されていなかったが、マスウードはカ
ラカン朝と名目上とはいえ姻戚関係にあるムハンマドを冷酷に排

除して友好関係を崩すわけにはゆかなかった。四二一年の冬バル
クからカーシユガルに行った使節が持参した二通の直談状はマス
ウードに都合の良い内容に終始しているが、そのうちマスウード
にとってより重要な第二直談状の方の主要案件こそはムハンマド
の処遇についてなのである。「我々の兄でアミールのアブーア
フマドムハンマドのことですが……彼は我々の命令で某所に蟄
居しており、極めて丁寧に扱われております……以前我々の兄の
名において結ばれた婚約が無効になったについて相すまないこと
だと思ふ……」と長々と記されているのだが、もしこの直談状の
情報が虚言とすれば、もう我々は研究のやりようがないというも
のであろう。とも角一月中旬頃までにクーフティーズから彼は
唯一人ゴール地方のいっそう山深い堅固そのもののマンディーン
要塞に象の担架で護送され、TB はその光景を悲劇的に物語る。
マンディーン要塞で首にされたのかもしれないが、断定出来ぬ。
Raveriy は後にマスウード命で首にされたとの説を紹介してい
る。マフムード朝の家系上の成員たちの内情を探る鍵としてムハ
ンマドが盲目にされたか否か知ることは肝要であるが、不明にせ
ざるを得ない。しかし史料群の真偽性や特徴に評価を下す有力な
鍵とはなかった。

① *Riyāq al-Ahwāh*, p. 47: fi yaumi al-khamisi li sab'i baqina

- min shahri Rabi' al-Âkhir sanat ihda wa 'ishruna arba'u mi'at. TB, pp. 13-14; Muftafa-ye khaft-e 'ummatahsh-e Hurra-ye Khutali—Khadavand-e ma-ye Sulhân Mahmûd namâz-e digar-e rûz-e panjshanbe haft rûz mände bûd az Rabi' al-Âkher god-hashte shod.
- ② TB, p. 325; An shab ke vey râ az mahallat-e ma-ye Sar-e Âsiyâ az Sarây-ye pedar be-Kushk-e Emârat mi-bordand; Aronds, p. 336. 清世の六七世の朝は不明だが、何れにせよ。
- ③ ZA, p. 194; TB, p. 322.
- ④ ZA, p. 194; Ghaznavids, p. 70.
- ⑤ TB, p. 681. 終にトクナレクの恭順表明に應答のたゞに、Bâ-dghis 銀行の設立 (Shihna) に注意せよ。
- ⑥ TMA, p. 144.
- ⑦ Ghaznavids, p. 228.
- ⑧ Sachau, Preface, p. x.
- ⑨ ナルゲルに『トルコ人の歴史』をトクトムに著して、その中に『トルコ人の歴史』(Bosworth, "Turco-Mongol Practice", p. 238)° TB, pp. 86-87; TN, vol. I, p. 231; Raveaty, vol. I, p. 88: Az vey ashâr-e arabiyat rivâyat besiyâr konand.
- ⑩ AH, p. 268; Sulhân Muhammad be-neze jang kardî.
- ⑪ TB, p. 13: Amir dânad ke az bartâdar in kâr-e bozorg bar na-yâyad va in khânedân râ doshmanân besiyâr va mâ 'aurât va khazâ'in be-saharâ oftâdim.
- ⑫ Juvaini, *Ta'rih-e Jahângoshâ*, part III, London, 1958, p. 100; *The Tazuk-i Jahângiri*, tr. A. Rogers, New Delhi, 1968, p. 270.
- ⑬ No. 8 Letter; V. A. Hamdani, "Some Rare Manuscripts in Istanbul", *JRAS*, 1938, pp. 562-563; 西蔵文書〇一冊の出土報告
- ⑭ 自筆本である。同書の校訂をサウソブゴフからのインチェホスター大学への留学生が博士論文として行なっているが、本國の出版業者から来たものである。
- ⑮ TN, vol. I, pp. 231-232; Raveaty, p. 90; Thomas, 1860.
- ⑯ TG, p. 402.
- ⑰ MRA, p. 14; TA, pp. 19-20; 親王 Abd al-Qâdir, *Muntahab al-Ta'arîfih*, Bibliotheca Indica, vol. LI, pp. 20-21.
- ⑱ C. A. Storey, *Persian Literature*, London, 1936, Section II, fasc. 1, pp. 65-66.
- ⑲ TA, p. 3.
- ⑳ No. 8 Letter.
- ㉑ *Dar Pyramtan-e Ta'rih-e Baihaqi*, Tehrân, 1342. 下記のインキーの終末部分の探索の書だが、実はインキーの朝研究史料集として、インキーの三世紀に著されたものである。
- ㉒ *Ta'rih-e Baihaq*, ed. A. Bahmani'yâr, pp. 70-71.
- ㉓ 写真に一九三三年九月一日に The Asiatic Society にて撰録。原本は W. Iwanow, *Concise descriptive Catalogue of the Persian Manuscripts in the Gunzou Collection*, Calcutta, 1926, MS No. 16. 母本國語の写本は、西蔵文書に W. Iwanow 親王の撰録 Sri Abdal al-khallaque にて西蔵文書である。
- ㉔ 撰録は西蔵の全文撰録のなかに、インキーのインキーのインキーのインキーの "Ali Akbar Mehriyari" にて撰録 (No. 11 Letter)°
- ㉕ No. 8 Letter.
- ㉖ TB, pp. 79-82: Az dâr gardi peidâ 'amad Amir goft ân che shâyad bûd.
- ㉗ TB, pp. 64-65.
- ㉘ ZA, pp. 187-189; TB, pp. 274-275.

- ②⑨ TB, pp. 268-280.
 ③⑩ TB, pp. 84-86.
 ③⑩ Raverly, p. 89, n. 8.

(C) ムハンマド派の没落

四二一年に苦勞して王位に就任したマスウードのその後の一〇年間は失政ばかりであった。その最後の最大の失政は四三一年九月八日(一〇四〇年五月二七日)頃にマルウ近在のダンダーナカーン付近で、セルシエーク族との戦鬪に破れたことである。彼らは敗走し一〇月七日(六月二二日)にガズニーンに帰着する。彼は恐怖症にかかりラホールよりまだ彼方の地で冬を過せうと秘かに手配する。バルクさを死守すればガズニーンは安泰との重臣の説得に表むき承服して、宰相 Muhammad b. 'Abd al-Samad と息子の Maudud を大軍と共に四三二年一月一二日(一〇四〇年九月二三日)頃バルクへ派遣し、自身も後を追うと明言したのであるが、実は誰も真に受けてはいなかった。彼の秘かなインド行手配の一策として二月一日(一〇月二二日)頃にムハンマドと彼の息子達が Naghar 要塞から、共にインドに帯同する魂胆で、ガズニーンに護送された。この事からムハンマドがマスウードの治政時に各地の要塞を転々としていたと推定できる。Naghar の位置比定に関し To'fi, Kurram 川沿いのガズニーンから六日行

程 (Yaqut, *Mu'jam al-Buldan*, vol. IV, p. 797) の如き語句のイラン人学者の常識的な説があるが、TB のこの箇所を普通に吟味してその場合の Naghar はガズニーンから五、六時間の距離の所と比定せねばならぬ。Amir Izdiyār は一日の間の間に一往復半したのでもある。

TB, p. 893: Kuz-e shanbe-ye ghurra-ye Šalar Amir Izdiyār az Naghar be-Chazmīn āmad va Amir rā be-dīd va bāz gasht va dar shab Amir Muhammad rā āvarde būdand az Qal'e-ye Naghar dar gohar-e in khodāvandāzde va dar Qal'e-ye Chazmīn borde va Sankhya-ye Amir-e Hāras bar vey muvakkal būd chahar pesarash rā ke ham āvarde būdand Ahmad Aa 'Abd al-Rahman va Umar va Uthmān.

因に Beveridge 女史が Raverly に甚き比定したカーブルの南南東一二二キロの Baghzan は筆者の時間推定と合致する。同じで困惑する記事が ZA に出ている。マントルは Qal'e-ye Naghar になく Qal'e-ye Bar Ghund (TA, p. 26; TR GHND) からインド行の途中の軍营地 (Lashkargah) に連行されたところである。④ ZA の著者ガルディージー(ガズナの東の Gardiz の人)が自著を執筆していた頃から僅か一〇年程の過去を記したこの情報に TB と相異するとは全くの驚ろきである。元来ハイハキーとガルディージーは同時代の人物だがお互い没交渉だったらしい。

バイハキーはの ZA の如き簡便な記述態度なるものを間接的だが非難している。現在、世界で最も ZA に通曉している写本校訂者でもあるヘビービー元カーブル大学教授はその序文で、ガルーディーの人生に就いて我々は全く何も判らないし、他の諸本に彼に言及した記述も一切ないし、我々は彼の書物から、彼が四二―四四三年頃その書物をガズナで著し、その晩年にビールニーとつきあいがあったという事ぐらいしか彼について知り得ないと言明した。私はその頃バイハキーがマスウードの正に懐刀として活躍している事を重要視してバイハキー説を採用するが、この記事の相異はガルーディーのガズニンにおける立場を暗示するように受けとれる。つまり彼はガズニンの在野の研究熱心な人物ではなかったか。ムハンマド一派のガズニン滞在は極秘事項で当然彼は知らなかったが、町には先のような風説が流れていた。彼はそれを書き留めた。両説を共に肯定する説は仮説の積み重ねになりそうでこの議論はもう止める。

バイハキーは上命によりムハンマドの四人の息子とは勝利の庭園の見張らし台 (Zahra) にて直接面会し誓約書に自署させたが、ムハンマドのガズニン要塞滞在の件は極秘で彼でさえも眼にしていけない。この時期に及んでマスウードが極端にムハンマド派を恐れたのは何故か判らぬが、彼がムハンマドを懐柔するために彼

の四人の息子を宮廷執事 (Vakil) と為し優遇処置を講じた背後には宮廷人の党派争いの火種が燻り始めその決定的混乱を恐れたのではなからうか。火種はムハンマド再擁立の動きだろう。マスウードはコーラーサン、ラッイ、イラン高原、ホラズム州の支配権を失なっていた。二月四日(一〇月一日)、マスウードは書簡で Habban 辺り(?) にいた宰相にインド行の件を初めて伝える。⑥ マウドゥードと宰相らがトカリスターンに出撃して後、三月七日(十一月一日)に一行はガズニンを全財産と共に出立した。TB の記録はここで一巻が完了し、続巻は今日に伝わっていない。今後は ZA, TN 等に頼るしかない。実は一行は北上し、ヒンズクシ山脈南麓の Habban 実地は Hupyan に至り滞在する。そこでマスウードは息子ムハンマドをマルチンへ二千騎と共に先発させる。⑦ Hupyan なる地名は妙にひっかかるので次節で述べる。さて一行は玄奘法師のインド行の Chorband 川に沿う道を通り、Pushavar, Vayhind を経て、終に Rabat-e-Mirigala に到着する。同地で予想された通りグラム軍隊は大量の財貨に眼が眩み軍規が乱れ、終にマスウードは逮捕され全軍がムハンマドに忠誠を誓う。⑧ 親ムハンマド派宮廷人の巻き返し背後にあったと推定される。筆者はその日付を TN のムハンマドの第二次政権の四ヶ月説を有力と考えて四月中旬頃と考える。僅か四ヶ月の

政権を動かしたのは盲目のムハンマドに代わって彼の四人の息子(特にアフマド)たちであったとの説が後代の諸史家に提唱され、特にRSはその点を除き大体信憑性のありそうな長い経過を伝える。^①RSの利用した史料が何かは今後の問題として残しておく。

マヌードは *Qale'ye Giri* (TN, p. 234; *Hisar-e Giri*) に護送され同地で五月一日(一〇四一年一月八日)に殺害された。^②他の諸説は次の通り。Raverty, p. 95, n. 6 は四三三年五月一日(TS, p. 366 (Smirnova, p. 344)) は四三三年、AH, pp. 252-253 は日時記入はなく、TG, p. 402 は四三四年、Ibn Bābā は四三三年二月、MRA は四三三年。この問題はTBが「ホルズム章」で間接的に「四三二年八月より少し前にマヌードが *Qale'ye Giri* で殺された」と記しているのべ、ZA 説の採用が容認されてもよいかもしれない。暗殺主謀者は恨みを持つムハンマドの息子たち、^③ホースフの息子 *Sulaiman* 等、^④ZA, TA, Z に依るにキーリー要塞守備隊長 (Kutwā) の *Ibn Bābā*, MRA に依れば *Muḥammad* の *TMA* に依るに *Tahīr b. Muḥammad* のいづれ。^⑤ZA に依ればムハンマドは全く暗殺に関知せず、その報を聞いて涙を流したと云う。TB がこの件で頼れぬので真相は不明とせざるを得ぬ。

マヌードの正式の後継者で息子のイスマアールは暗殺の報を

バルクで受け、直ちに復讐戦に出立するが宰相ムハンマドの、先ずガズニーンを掌握して春に戦えとの忠告に従う。兩陣營の戦闘の日時はTB から四三二年八月一日(一〇四一年四月二日)と判り、^⑥現在の *Jalalabad* 辺りの *Dunpūr* で二日にわたって行なわれ、策略を弄したマウドワード側の勝利に終り、ムハンマド派は彼の息子 *Abd al-Rāḥim* を除き全員酷刑に処された。^⑦マウドワードは戦勝を記念しそこに今日も同名の *Jalalabad* 付近に残る *Fathabad* (戦勝の場) なる村落を造成した。^⑧実にマフムードの有力な二人の息子は同年に生れ、同年に相繼いで殺害せられたのが真相であった。マウドワード治下マフムード朝はガズニーン・バルク軸路線を維持し、その後も歴史の波にもまれ、変遷こそあれ、百年余り王朝は存続してゆく。

① TB, pp. 863-893.

② KTB, pp. 357-359; ZN, 342 ab, 343 ab.

③ Babur, p. 206, n. 1.

④ ZA, p. 204.

⑤ TB, pp. 893-894.

⑥ TB, p. 895, n. 5; TB, pp. 882-883, 885.

⑦ TA, p. 26, 27; ZA, p. 204 223 *Majdād*. 元は原写本に *ḥamd* (n. 3) とあるのをイスマアールが勝手に読み変えたもの。ムハンマドイスマールの息子の中にも (TMA, p. 149)。

⑧ TN, vol. I, p. 232; ZA, p. 205; TB, pp. 896-897. 宰相のイスマ

ウー下宛の首をかけた書簡に事態の子測が示されている。

- ⑥ TN, vol. I, p. 234; Raverty, p. 96.
- ⑦ RS, p. 745.
- ⑧ ZA, p. 205; TA, p. 27; Turkestan, p. 303; TMA, p. 146.
- ⑨ TB, p. 944; Pish az an be-moddati vey rā be-Qa'le-ye Guri be-koshte bitand.
- ⑩ ZA, p. 206; RS, p. 745.
- ⑪ TMA, p. 146.
- ⑫ ZA, p. 205.
- ⑬ TB, p. 944. ZA は八月と云ふ。Raverty, p. 97, n. 2 の四三四年説は解せず。
- ⑭ RS, p. 745. 'Abd al-Rahim はイスラームの死体に対する唯一の袂袋の命を助命せられたと云ふ。Raverty, p. 90, n. 4, (Yalya khan, *Tazirnat al-Mulak*) の同ノ記号。
- ⑮ RS, p. 745; TMA, p. 146; H. Yule, "Papers connected with the Upper Oxus Regions", 1872, p. 450; Raverty, p. 97, n. 2.

四 地名・人名考

斯く述べられた本稿も TB の信頼性の高さを示すことになつた。TB ではテキスト自体問題がなからかと言へば案に反し事態は悲観的である。TB は最古の写本で一六世紀のものしかなく、殆どは近代のもので、文章や詩や固有名詞などに正しく判読できぬものが多いためである。TB の写本の権威マッシュアッドの故 Fayyād は世界各地の多数の写本を三〇年近くかかって比較し校訂版を完

成させた。本稿も同テキストを土台にしたが、彼のテキストにも問題ありとせざるを得ぬ。同氏は卒直に無数の難所が残っていると認めた。いわば同氏のテキストはテキスト問題のむつかしさを改めて我々に認識させるものであった。大きな短所としてまず二〇種の写本の所属先の解説がないし、現在のアフガニスタンを主題とする書物をイランの学者のみが校訂したのも納得がゆかぬ。

因にアフガン側のハビービーが校訂した ZA, TN, *Tabuqat al-Sūfiya*, *Fudat il-e-Balch* 等の書物の出来ばえはイランの学者の研究とは比較にならない程である。このハビービーの TB に関する意見は筆者の知る限り本稿でも使用した TBA のみしかなく。

Fayyād は TB テキストをインド系統とイラン系統に分け前者をより本源的とみなしている^①ので、インド系統の六写本を校訂した Morley の業績は今日も第一の価値を有すと言えるが、地名や人名の読みで写本通り転記したのでろうが初歩的誤りが多いし、索引がないので不便この上ない。だが今後の研究では Fayyād で判らぬ箇所は一応 Morley 版を参照すべきであろう。ソ連の Arends は一〇年以上前に全訳を発表した。アレンドス氏の訳注は正確なことでは高水準にあり、実に役立つが、テキストの読み方に新説を提出しておらず、全面的に旧 Fayyād 版（一三二四一三三四年テヘラーン）に頼り、重要な箇所の多くは未解決のまま残され

つらるのべはる。

(A) 地名考

ハバハ・ブユーウーの TBA への考察は続々かゝる今後は増補し
てゆかばなる性質のべはる。

Bazh-e Ghūzak (Pazh-e Ghūzak) TB, 378, 519, 738—
Arends pp. 378, 501, 861 且 Pazh-ni Ğuzak (Паж-ни Ğузак)
とある。Fayyād p. 378, n. 2 は BA 原本は Ghūrak とあり
しはるが Ghūrak は悉皆はる。和田はハブユーニー
の『汗血の組織の総論の書』にハムラン・ハムノーンを註は
る。Ghūrak は語はハズるのべはる。Bazh, pazh は亦ハ
ハバハの義。

Darīna TB, 329—Arends, p. 340 且 Darīne とあり
Fayyād は本文は Darīta と記しながら同頁の注釈四は Da-
rīna とあるを考へた。Morley, p. 305 且は Darīna とあり。
またハバハ Biruni, p. 215; Sachau, p. 259; Babur, pp. 421
—422 の Darīta とある。ハムカーン地方のトルワン川と
Sharwat 川の合流地点はる。今日の Darīna かもしれぬ。^④

MIR Mināra TB, 895—Arends, p. 800 且 Marminār と
あり。ハバハ Biruni, p. 215; Sachau, p. 259 の Mināra と
あり。トルンシャワル近在のトルワン川岸はる。Fayyād は注

釈四はトルタンと考へた。

PRKD (Parkad) TB, 737, 738—Arends, p. 681 は Parka
とある。シヤタル地方の地名はるが Farghar (BGā, vol. I,
p. 277; vol. III, pp. 290-291) が MRKD (BGā, vol. III,
pp. 290-291) のハバハとハバハと。前者は現在
の Пархар
と。後者は今日の位置不明はる。

Haibān—TB の諸原本は文字は Binān, Būiyān, Bīsa-
n, ??? an 等。Fayyād は TB の BA 原本の Haibān の語を
採つた。Morley, p. 818 は Haibān 等。Arends, pp. 789, 792
は Xaibān とあり。Arends は注釈はる。ハブユーニー
の原本の Hīlsān を Hūiyān と見事な読を、位置比定に成功
した。^⑤ Hūiyān は Haibān と字趣は全く同一なるはる。この
判読の成功は意義が大きい。ハバハの義は Hubāna
とハバハカーンの西約五キロのハムラン山脈の麓の Opiān と
あり。TB, ZA 共にこの地名は前述したハムランのハバハ
の作戦に際してのみ出マフムード朝の他の諸史料は勿論、一〇
世紀のマラン地理書のどれも近々の Barvān に触れはる Hūi-
yān に言及するものは全くない。^⑥ マウドゥードと宰相の大軍は一
時同地に滞在し、トカリスターンに出撃し、後でハムラン
同地に来た。珍しい地名だけに気になる。以下は簡単な仮説。

① Magdisi (BGA, III, p. 296) に依ると当時 Barwān 辺りまではバルク州に入っており、トカーリスターン作戦の、ガズニン防衛の、軍事基地として立地条件が良かった。

② 玄奘に於て迦畢試国は物資の豊富な国だったが、マフムード朝期においても軍事物資の調達可能な土地だった。

③ ヒンズクシ山脈越えのルート——この諸ルートの詳細な分析は Sir H. Yule, H. Cordier, *Cathay and the Way thither*, vol. IV, London, 1916, pp. 255-259 に “Note on the Passes of Hindu-kush” と題してあるが、ここではマフムード朝の軍隊の山越えのルートを確認するのに留める。従来大して注意されなかったが、マフムード朝は首都を二つ持った。夏はガズニン、冬はバルクで、ガズニンのみを首都と考えるところの王朝の性格を見誤ることになる。季節の変わり目に一行は中央に横たわる山脈を越えたが、マスウードは王座に就任後六度越えた。

④ 四二二年五月（一〇三一年五月）はバグラーンからゴルバインド峡谷經由でバルヴァーンに出るルート。

⑤ 四二二年一〇月（一〇月）と四三〇年一月（一〇三八年一〇月）にはバルヴァーンとアンダラーブとワルワリージ^⑥を結ぶルート。

⑥ 四二三年五月（一〇三二年五月）にはバルクの直ぐ南のガ

ズ峡谷經由のルート。

⑦ 四二七年七月（一〇三六年五月）には、Rah-e-Hadrat-e Ghaznin (ガズニンの大君の道) のルート。

⑧ 六番目はダンダーナカーンから敗走した際のルートで山脈を西から東へ縦走したものである。

各ルートに記された山脈中の地名は比定できぬのが殆どである。Zireqān 及 Babur, p. 222 の Zindān 及び Dasht-e Hūrāna, Manzel-e Chaugāni 等は判らぬ。

(B) 人名考

TB には多数の人物が登場し、今後の調査が望まれるが、ここではマフムード朝の構成員の中の Hurra-ye Kalji 及 Hurra-ye Khuttali を選ぶ。兩人ともセブクテイギンの娘で、マフムードの妹か姉にあたる。もともとイスラム史料では女人の名が登場する実例は珍しく、筆者はサーマーン朝の場合一人も知らない。両女人の吟味は、マフムード朝の事実上の建国者セブクテイギンの人脈を探る極めて貴重な手掛りと思われるが、以前誰一人注意を向けた研究者はない。

Hurra-ye Kalji——この形は TB の全写本に見える (Morley, p. 838)。Arends 及 Kalji と讀むが、Благородный を冠する whom 注釈を付してあるが、ホスワルス氏及 Kalji (Kalji) の誤植

ムハンマド、マスウード関係の難解地名リスト


- | | | | |
|---|------------------------|--|---|
| ① | Qal'e-ye Sugāvand | TB, 163, 329,—HA, 111, 347 (Sukāvand); Babur, 217 (Sa-333 jāwand) | Barak 付近の Logār 川沿い。 |
| ② | Qal'e-ye Mandēsh | TB, 12, 79,—Pazhwak, 16-19: PK (from <i>Ta'rikh-e Sūri</i>), 83-85 | 29-32。現ゴール地方の Sākhar, ヘラートの東南東 150 km。 |
| ③ | Qal'e-ye Kūhtiz | TB, 3—TBA, 150; ZA, 149, n. 5 | カンダハールの西 (Qal'e-ye Rukhkhaj, ZA, 194) 16 km のアルガンダーブ川の西岸。その廃墟がある。 |
| ④ | Qal'e-ye Giri | TB, 357, 570, 895,—ZA, 205, n. 1 | パキスタン北部のカガン谷の 944 Gahari。 |
| ⑤ | Qal'e-ye Dasht-e Lokān | TB, 181—TBA, 145-146 | 今日同名の地はない。Panjvāy と Bust の間に Tah Lōkān 地方がある。下部ローカーンの意。 |
| ⑥ | Qal'e-ye Mārigala | TB, 878—ZA, 204, n. 11 | タクシラとラウルピンデの間で今日も同名。 |
| ⑦ | Qal'e-ye Bar Ghund | ZA, 204—Raverty, lviii (Baz Ghund, 「丘の上」の意, TN, 236-238 | 101, n. 1)。ゴール地方の要塞。Sulṭān Ibrāhim が13年間幽閉される。語源パシュト語の Bara Ghundī (TN, vol II, pp. 327-328)。 |
| ⑧ | Pirūz Nakhchir | TB, 320, 738—TBA, 143; Sam'āni, f. 436a (al-Firūz Nakhjiri); Marquart, <i>Ēransāhr</i> , Berlin, 1901, 81-82 (Peroz-Naxčēr)。 | 今日も同名でフルム, クンドズ, バグラーンの間。 |
| ⑨ | Balaq | TB, 271, 322, 327, 333—Arends, 422 AH, prim, 73。 | 現 Baraki。カーブルとガズナの間。 |
| ⑩ | Sajkāv | TB, 333, 548, 549— | 現 Šašgaw。ガズナのすぐ北。 |
| ⑪ | Teginābād | 頻出—TMA, 145 | ヘルマンド川とアルガンダーブ川の間。 |
| ⑫ | Vayhind | TB, 895—ZA 177, n. 5。 | インダス川左岸アトックの西16 キロ。今日 Hind なる都市趾。 |

か)と記した^⑭。筆者は先ず地名を考へて TN, Biruni, Ibn Hau-
qal, Babur, ZN, Sam'ani (GMS 版), Yaqut 等多数の文献にあ
たり、成功しなかつたので、民族名かと推定し、探求したところ
Khalaj 族^⑮が見出された。ウトビーに依れば遊牧民のアフガン族
とカラジユ族がセブクティギンに服従し何千騎もの勇士が彼の軍
隊に加わつたとあり、更にこの部族はガズニン周辺に住んでい
た。Kalji→khalaji→khalaji と本源は何かの語れるのではな
いか。即ち、インド＝カラジユ朝の始祖はムール、ガルジユस्ताー
ンの Qalay Khan であるが、別の某写本では Khalaj Khan と
ある。Hurra なる用例は ZA など他の史料に全くないので困
のだが、TB に Hurrat-e Bozorgān を見出した。「高貴の婦人」
の意味が無難なようである。カラジユ族の姫君であろう。この姫
君は四〇六年ホラズム王の後宮に入り、四〇七年にはホラズム動
乱のさなかガズニンに救出された。三八〇年頃の生れだろう。

Hurra-ye Khutlali——この人物はクッタルと関係のある姫君
と直ちに判明するが、従来クッタルとセブクティギンがどうつな
がるのか、何故に彼に「クッタルの姫君」と称される娘があるの
か謎に包まれていた。確かに「TY」にはサーマーン朝ヌーフ二世
(在位三六五―三八七年)の治政時に彼がクッタルを配下に置い
ていたと推測させる件があるが、最近、大量の「倍数ディルハ

ム」と称される新資料がバダクシャン辺りで出土し、実にその中
に三八四年頃にセブクティギンによるペンディーシャラグ鑄造
の倍数ディルハムが三個、貨幣学上初めてのものであるが、発見
されたのである^⑯。通常のディルハムより直径で二倍、重量で四倍
あり、刻された文句も多い。次に銘文を紹介する。

裏	Hasbuya rabbuyi/ia i(Qa)ha illa/Allah/ (wa)hdu ii hu/ia sharika hi hi
内側の縁	bismi qurba hadhā al-Dinham bi Andjaragh Kurat
外側の縁	『コーラン』XXX, 3-4
周	12 Ghiyāth 6 Harb
裏	Allah/Muhammadu/Rasulu Allahi/Schükteg/in Amir
縁	『コーラン』IX, 33
周	12



Hasbuya rabbuyi (私の主は私にな余りありません)の文句が
Andjaragh Kurat 鑄造の物の顯著な特色で、裏面にサーマーン
朝の王名がなく、セブクティギンの名があるのは極めて重要であ
ると思われる。実は「Nuḥ b. Manṣūr, Andjaragh 知事 al-
Harith b. Harb, 鑄造年三七一―三八四年頃」の倍数ディルハム
が七個あることからみて、セブクティギンのこの倍数ディルハム
は少くともクッタルの中の諸都市の中で Andjaragh を彼がサー

マーン朝から独立した領土として掌握したことを示すものと考慮される。クッタール地方の首都は王の住地は Hulbuk であるが、HA には *Nuchara* (Andjaragh) だ「クッタールの物資の集散地 Bargah-e Khuttānast」との記述があり、^⑧ 経済の中心地であるからにはセブクタイギンの支配地として意味深いものである。Andjaragh の位置は確定してはならないが、筆者はストラオンチとミッチナーのヤズンレム峡谷の入り口との説を否定し、ミンルスキーと連の学者の言う Farghar 付近との説に同意したいように思う。^⑨ 川と山脈の交錯したクッタールの歴史地理を中世文献で窺うのは極めてむづかしい。とも角、セブクタイギンとクッタールの意義深い関係が浮び出たからには、クッタールの姫君はクッタールの豪族の長、ないし、王家 (Banjūr 朝かもしれない) につながる女人の子であろうと推定して良からう。TB にはこの姫君の秘密文書も収録されており、ガズニーンへのレムで政治の行方を大いに操っていた形跡のある影の実力者であった。

これらの考察が正しければセブクタイギンの四人の妃が浮び出る。Rā'īs-e zāruīstān の娘、Alptegin の娘、Khalaj 族長の娘、Khuttal の長者の娘である。この中でマフムードは一番最初の人物の子であった。^⑩

⑩ “Nosakhe-ye khatī-ye Tarīkh-e Bahagi”, *Yadnamc*, 1971,

vol. 1, pp. 516-529.

⑧ *The Tarīkh-i Bahāgi*, Bibliotheca Indica, vol. XXXVII, Calcutta, 1862.

⑨ *Kitāb al-Jawāhir fi Ma'rifat al-Jawāhir*, ed. F. Krenkow, Hyderabad, 1936, pp. 219-220.

⑩ W. Simpson, “On the Identification of Nagarhara, with reference to the Travels of Hiouen-Tsang”, *JRAS*, 1881 ⑥ 地図参照。

⑪ Z4, pp. 204 (n. 2), 205.

⑫ 女史『大唐西域記』水谷真成訳 平凡社 昭和四六年 三七三頁。

⑬ Isfahri, BGA, I, pp. 276-280, 286; Maqdisi, BGA, III, pp. 296, 303; Ya'qubi, BGA, VII, p. 288.

⑭ フシヒタヤシムレキサンダー遠征軍に関する言及の中で、ンベヤーン辺りがヒンスタン山脈の南麓で軍隊を補給し得べき唯一の地点ではなからうかとあるのが参考となる。A・フシヒ著日仏会館編「フンガニスタンに於ける女史三蔵旅程の註解」『仏教美術研究』大雄閣昭和三年 一一九—一三〇頁。

⑮ TB, pp. 319-333.

⑯ TB, pp. 376-378, 738-744.

⑰ TB, pp. 454-455.

⑱ TB, p. 651.

⑲ Arends, p. 808.

⑳ C. E. Bosworth, “The Early Ghaznavids”, *CHIr*, vol. IV, p. 174.

㉑ V. Minorsky, “The Turkish dialect of the Khalaj”, *BOSOS*, 1939-42, pp. 417-438; idem, HA, pp. 347-8; PLC, pp. 46, 69-82; IQ, p. 21; The Life, p. 30; Fazhwak, pp. 35-36.

- ①⑥ TTY, p. 33; PLG, p. 72.
 ①⑦ TA, p. 116.
 ①⑧ PLG, p. 70. TA→Tarih-e Fereshta の誤記による。
 ①⑨ TB, p. 334.
 ②⑩ TTY, p. 133.
 ②⑪ M. Mitchiner, *The Multiple Dialects of Medieval Afghanistan*, 1973. London, p. 110. 三個共ミッチナー氏所蔵。この大抵発見は前世紀の *Hudud al-'Alam* 写本の発見とも相当するようと思われる。ミッチナー氏の研究は文献の裏付けが弱いが、大量の貨幣資料の精妙無比な大系的な紹介として優れており、漸新な成果を多数含み、今後の研究次第では従来のサーターン朝・マフムード朝像が修正され、その他の未知の部分が解明されるであろう。
- ②⑫ M. Mitchiner, op. cit., p. 110. ミッチナー氏はモンクタイギン貨の Harb ʿal-Harib b. Harb (ハダクシヤン知事) の息子かその兄弟とみる (pp. 29, 109)。
- ②⑬ *Hudud al-'Alam*, ed. M. Sotoudeh, Tehran, 1962, p. 119.
 ②⑭ G. Le Strange, *The Lands of the eastern Chahpathate*, London, 1966. Map IX; M. Mitchiner, op. cit., p. 108; HA, pp. 119, 359-360; A. M. Berezniukii, M. B. Bentrovii, O. F. Dolyanov, *Srednevekovyi Topod Srednei Azii*, Leningrad, 1973, стр. 181, pnc. 73. W.R. Rickner, *The Diach of Turkestan*, Cambridge, 1913, pp. 438-439. Farghar 辺りの記行が記されたところ。Andjaragh の既定に対し、Farghar が鍵なのだが、モンローの地図には同じ地名が二ヶ所あるため混乱している。だがタジク共和国発行の地図 (*Annae Tadjickoi Codemencoi Conqatamencoi Peuydarici*, Dzyuadze-Moskva, 1968) では現代の歴史の両地図にオクサス川上流域の Farghar が記されておらず。The Earl of Dunmore, *The Pamirs*,

London, 1893 の付図に下流域の Farghar の近くは Anjirak なる地名がある。An(di)jaragh との字型類以上一応注意しなくてはならぬ。
 ②⑮ Nizām al-Mulk, *Siyar al-Mulk*, ed. H. Darke, Tehran, 1340, p. 149.

ま と め

本稿ではマフムード朝研究の上での基礎的な事柄の考察をマハンマドの事蹟を探求しながら試みてきた。著名なマフムードの指名した後継者のムハンマドについて、従来まとまった研究がなかったもので、本稿もその意味では意義があるかと思う。だが、調査の結果、真相把握が極めて困難で、真相の近似値らしきものは判明するが、何れにせよ断言できぬ場合が多かったが、副産物として諸史料の信頼度がムハンマド紀について相当明白に浮びだした。信頼度の高から言えると、

TB	RS
ZA (TA)	TC
TS	
TN, RS	

の順となる。TB の信頼度の高さは既に言い触らされてきたのであるが、筆者はあえて TB はかっつての TB そのままでなくと強調し、テキストの読みに修正を加えて行くべきと主張した。マフムード、ムハンマド、ナスワードの事蹟は TB を利用し得るの

で、事実関係の核心に相当接近し得るが、TBでさえ最後の切札となり得ない場合がある。マフムード朝はダンダーナカーン戦争での敗戦を境に前・後期に時代区分ができ、同朝前期の研究は厳正な研究が相当あるが、後期の研究はボスワルス教授の見解では無いとされる。本稿は前期と後期の過渡期を対象とするが、TBがこの時期について偶然ながら残存していた事は幸運であった。今、後期研究に対する諸史料の見透しを考定してみたい。TBに代り根本史料となり得るINにより事件の再現はでき得るであろうが、年代や事実関係は必ずしも真に受けとれぬ場合がある。チームール朝期のRSが役立つと思われ、INは危険な史料ではなからうか。本稿の史料批判はムハンマド紀に限定されるものかもしれない。ゴール朝期のINがゴール朝等と抗争する後期マフムード朝に対しては信頼できる情報を提供する可能性を否定するものではないが、前期に対し優れたZAとさえTBと全く相異なる記述をのせる事を明示した私には、後期のINに前期に対するTBの如き高い信頼度を付与するわけにはゆかぬ。なお、Ibrahimの治政まじりの記録を含むところ、TBの消失部分が一体どの史料群にどのように収録されておるかを吟味する作業も残さ

れている。TBの紛失部分探索はナフィーシー、アレンドス、ボスワルス等諸史家の最大の課題とされてきたし、今後もそうあり続けるに違いな難問なのである。

補記

本稿の成立についてロウィック、ベート、キュリエル、ドブロヴァリスキー、ヴィヨフ、ボスワルス、アリーの諸氏の貴重な鑑定、評価、助言を得たことを深謝するものである。なお、本稿で重視したハビービー氏は先のクレーターの波をかぶったらしいのだが、今後も健筆をふるってもらいたいと願わずにはおれない。

〔補注〕

史料整理中に第三節Bの注⑩で提示のNafisi 本にムハンマド、イスマーイール関係の記事を発見した。a) *Nasir al-Din Munsshi Kernani, Kitāb Nusādīm al-Asīyar min Lailīn al-Abhār* (情報の香料箱) の早期の微風(の書)、b) *Saif al-Din, Muḥar al-Ḥizān* (宰相達の事蹟)。a)に *kohtar pesarash* (p. 143)、b)に *pesar-e khoidar-ā* (p. 134)と「ムハンマドの方が年少」とある。AHの核訂者は諸写本 *mehar* になじし *bozong* とあるという。a) b)共に同時代史料でなく他に誤りあって信頼度は低いと私は考え、参考意見に留める。